

“TERAKOYA”

<企画案>

教育・子育て・国際交流 作業部会
出水委員・神崎委員・栗谷委員・渋谷委員・三木委員

基本理念

- 社会のグローバル化・ボーダーレス化
- 学びに対する意欲・関心の低下
- 格差社会の進行
- いじめ等の諸問題



- 自らの考えをしっかりと持ち、他者へ伝えられる
- 自分と他者との違いを理解し、受け入れる



- 次世代を担う子どもに“夢”のある政策提言を

次世代の子どもに求められるスキル

- 自分の意思・意見をしっかり持ち、表現できる。
- 異なる文化・伝統を理解し、敬意を持つ。
- 自国の文化・伝統をしっかり理解し、伝えられる。



国際化＝英語能力といった従来の安易な発想ではなく

○本当に必要な能力の向上

○専門性のあるスキルを身につける

自分と違うことを認めることがいじめ撲滅にもつながる

“TERAKOYA”の創設

- 色々な学習の入り口を作り、子ども達が将来的に何かに特化して学んでいくことを最終目標とする
- 公教育では学べない“ホンモノ”を体験する機会を提供



- テーマに沿った意見発表、ディスカッションを行う

“こども討論教室”

- 教科書の世界と本当の世界は＝（イコール）なのか？を考えるべく体験型講座とする

“こどもアンバサダー（外交官）会議”

“こども討論教室”

- ターゲットは小学生～高校生（テーマによって設定）
- 参加者数は20名程度を想定
- テーマは、タブーを恐れず現実社会に存在する問題について取り上げる
- 参加前には情報リテラシーについて十分理解して頂き、自らの手で誓約書に署名してもらう
- 講師によるレクチャーののち、参加者の意見発表
 - ⇒ 自らの意見をしっかり持ち、他人の意見に耳を傾ける
- 様々な意見を聞いたうえで、最終的に自らの意見を改めて考える

実施案

○「国連は必要か（世界は平和になったのか？）」

講師 元国連職員

○「勉強はなぜするのか？」

様々な年代の意見を聞いたうえで考える

○「刑務所とは？国際化と外国人犯罪」

刑務所見学を実施したうえで考える

○「バリアフリーはどこまで必要か？」

“こどもアンバサダー”

- ターゲットは小学生～中学生（テーマによって設定）
- 参加者数は20名程度～を想定
- “教科書やテレビ等の映像ではなく、
ホンモノの世界を感じる”をテーマに体験型中心
⇒ 自らの目を見て、肌で感じて、自らの頭で考える
- 学びの入り口を目指す

実施案

○「ハンガーバンケット」

貧富の格差を疑似体験

○「世界のお菓子」

総領事夫人などと一緒に作る

○「世界の祭り」

起源を知り、本来の意味を学ぶ

○「茶道・華道など日本文化を学ぶ」

世界に誇る日本文化の魅力を知る

基本的な運営方法

- 運営は実行委員会
- メンバーはNPO・区役所・国際交流センター等を想定
- NPOを主体として進める
- 窓口、広報、会場等は実行委員会にて検討
- 当初は、討論教室・アンバサダーを交互に毎月開催
- 運営経費は、参加費及び企業からの協賛金・寄付金
- 経費は一講座につき5～10万円を想定

継続的な事業となるように

- 継続的な講座受講を促す為、一定の講座を修了するとステージがあがる等、子どもの興味を引くシステムを検討。
(ex:外交官→領事→公使→大使など区長が“任命”)
- 広く門戸を開き続ける為、行政・政治が深く入り込み過ぎないように注意し、また、偏った内容とならないよう配慮が必要。
- 区役所はあくまで窓口に徹する。
- 将来的には、民間からの持ち込み企画にも門戸を閉ざさない。

課題

- 運営スタッフの確保
- 参加者の年齢にバラツキが出る
- 参加費以外に必要な経費（材料費など）を参加者から追加で徴収するのか